予告 Future Event

JAGDA新人賞受賞作家作品展2005

居山浩二・近藤ちはる・中嶋貴久・中西"サビ"一志

2006年1月7日［土］－14日［土］
12：00➜18：00（日曜休館・最終日は17：00まで）
休館日　8日,9日　入場無料
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
主催：名古屋芸術大学デザイン学部
社団法人日本グラフィックデザイナー協会(JAGDA)

● **関連企画：JAGDA2005新人賞受賞作家によるレクチャー**
1月14日［土］13：00－16：00　B棟 大講義室
※16:30－18:00アート＆デザインセンターにてパーティを行います

1978年に発足したJAGDA／社団法人日本グラフィックデザイナー協会は、現在、会員数2,300名を誇る日本最大規模のデザイン団体として、多彩な活動を行っています。その一環として、会員作品集「Graphic Design in Japan」出品者の中から、39歳以下の新鮮かつ作品の質の高いデザイナーに毎年「JAGDA新人賞」を授与しています。本展では、2005年の受賞者4名の受賞作品および近作をご紹介いたします。また、関連企画として、受賞者によるレクチャーも開催いたします。

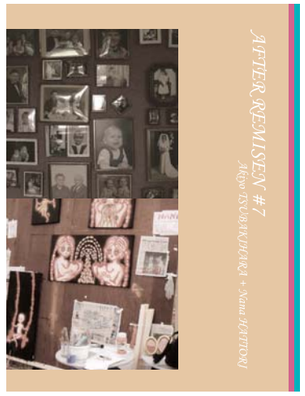
AFTER REMISEN #7

椿原章代＋服部奈奈

2006年1月28日［土］－2月4日［土］
12：00➜18：00（日曜休館・最終日は17：00まで）
休館日　29日　入場無料
会場：名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
主催：名古屋芸術大学美術学部版画研究室

● **オープニングレセプション**
1月28日［土］16：30－18：00

今回で7回目となるデンマーク・ブランデ市のレミセンアカデミーとの国際交流。2005年度にデンマークに招かれ、制作を行った本学OB作家による帰国報告展。同時開催としてこれまでにデンマークに招かれた本学OB作家と本学に招いた欧州作家の小品展も開催します。



アート&デザインセンター
12 EXHIBITION → 2 SCHEDULE
展覧会スケジュール
Open 12:00—18:00
（最終日は17:00まで）
日曜・祝祭日休館

［入場無料］どなたでもご覧いただけます。

12/ 1(木)→12/ 7(水)	形式と拓	中国国立中央美術学院&名古屋芸術大学国際交流展
12/ 9(金)→12/14(水)	工芸選択コース作品展	
12/16(金)→12/21(水)	名古屋芸術大学後期留学生作品展	
12/22(木)→ 1/ 6(金)	冬期休館	
1/ 7(土)→ 1/14(土)	JAGDA2005 新人賞展	
1/21(土)→ 1/26(木)	日本画コース作品展	
1/28(土)→ 2/ 4(土)	AFTER REMISEN#7 椿原章代＋服部奈々	

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町　tel.0568-24-0325　fax.0568-24-0326

編集後記

2005年、中部地方は「愛・地球博」の開催と新空港「セントレア」の開港などで賑やかな1年でした。一方、世の中では悲惨な出来事も多く起こりました。人に対してはもちろん、私たちの置かれている環境に対してもやさしくありたいと思います。2006年、皆さまが幸福な時間を過ごせますように。

Ble　Vol.11
発行日　2005年12月22日
編集　江坂恵里子（アート＆デザインセンター）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町徳重西沼65
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326
E-mail　adc@nua.ac.jp
URL　http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印刷　サンメッセ株式会社
2005　Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2005 Vol. 11
ART & DESIGN CENTER NEWS

パフォーマンス
石田達郎（「形式と拓」展 in circus）

特集 Performance Art

『身体表現』

「もの」と「こと」パフォーマンス・アート ― 残された物品が語るもの

ライブペインティングパフォーマンス
松藤春花（「形式と拓」展 in circus）

「身体」「空間」「時間」を基軸に表現され「行為」を芸術とすることは広く一般的にパフォーマンスアート呼ばれている。これは反芸術の側面を持ちつつ戦後アメリカを中心に発展した「表現」でもあるが、日本でも１９５０ - ６０年代には様々なグループが活動し始め今日に至っている。私たちのもっとも身近である身体は、アートのもつ普遍性とは裏腹に「生」「死」からは無縁となることがなく日々変化しながら完全な「個体」として存在する。遠い昔、原始の頃に言語が発生する以前はその身振りや発声などの身体表現が唯一のコミュニケーションであったであろう。そう思えば身体を使っての表現行為はもっぱら自然なことでもあり、まったく根深いものであるとも言える。

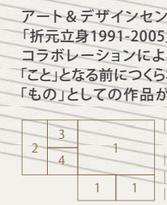
とりわけ「芸術」「美術」という枠組みで考えれば、この身体表現すなわちパフォーマンスアートとはまさに意表をついた表現であり「ビックリ箱」的なものである。一時の行為が過ぎ去った時間とともに人々に記憶され、また一種のハプニングとして時のはざまに立ち表れる。それは観客や記録が存在してこそ意味をなしてアートとしての価値を持つものであろう。

すなわち美術の王道でもある「絵画」や「彫刻」といったジャンルはすべて結果物であり「もの」作りである。それに対してパーフォーマンスアートとは「こと」作りなのである。現場での目撃やプロセスといったことがその中心であり、まさにライブなのである。そしてそのリアルタイムな現場での鑑賞とともに過ぎ去った時間が写真や映像により記録され、使用された品々はその痕跡物とされ「もの」となる。人々は後日その残された記録や「もの」を見ながらそのパフォーマンスを追体験することになるのである。本来この「もの」づくりが主体となるはずの美術が「こと」作りに転換されるパフォーマンスアートはまさに予測不可能な繰り返しのきかない裸のアートとも言えるだろう。

須田真弘　名古屋芸術大学 美術学部 助教授

「折元立身1991-2005」展

アート＆デザインセンターで11月1日−15日に開催された
「折元立身1991-2005」展では、初日に折元氏と学生たちとの
コラボレーションによるボクシングパフォーマンスが行われた。
「こと」となる前につくられた「もの」、「こと」が起きたことによってつくられた
「もの」としての作品が展示された。



1＋折元立身展　パフォーマンス
「ボクシング・パートナー」の様子2005年11月1日
2＋「1999年の母の医療と社会福祉」1999年
3＋「ボロボロのダンボールボックスと母の生活の声」1999年
4｜「母の大きな靴」1997年

特集 Performance Art 『身体表現』

パフォーマンスとドキュメント「芸術計画演習」における実践「人間企画」

2005年11月1日-15日　G棟103教室

4年生の授業「芸術計画演習」では、アート＆デザインセンター「折元立身展」に関連させて、"パフォーマンス"の企画と実施、そしてその記録に取り組んだ。この授業では、美術・デザイン・音楽の各学部の学生が共に学んで共同する機会でもあり、グループワークによる実践として進行した。

◎パフォーマンスって何だ?
"パフォーマンス・アーティスト：折元立身"とはいったい何者か？
彼のドキュメント映像や、折元氏によるレクチャーなどを通して、
自分達が作品を制作したり演奏したりすることと、何が違うのかを考えてみた。
折元氏は、自らの表現を"ライブ・アート"であり"生きた彫刻"だと言う。

◎コミュニケーションはむずかしい....。
グループワークは、メンバーの意見交換からはじまった。
みんなで何を企画しようか？意見がなかなか出ない...。
なんとかまとまった企画。いちお、頭では考えた。
折元氏が、また現れて言った。「思いきって、やるんだよ!」

◎何が伝えたいのか？まずは、やってみよう!
そうだ、自分達の身体を介して、メッセージを伝えてみよう。
9月17日、オープンキャンパスの学内で実行!

◎もっと、伝えたい!
はたしてパフォーマンスは、うまくいったのか？
メッセージは、ちゃんと伝わっただろうか？
その意味を自分達で検証しながら、新たに"記録"の作成に取り組んだ。
『人間企画』は、パフォーマンスの意味を確認するドキュメントだ。

1｜&｜2＋「ゴミ人間」　ゴミ箱の中には、まだ賞味期限が
切れていないパンやおにぎりが....。
3｜&｜4｜あなたはこれをゴミだと思いますか？
展示では、対応する人々のインタビュー映像を作成。
「米人間」―折元さんの「パン人間」に対抗(!?)して、
われら日本人は「米人間」だ。

5｜「人間マーケット」あなたは自分はいくらだと思いますか？
のっぺらぼうの丸い頭になって、値段のついた自分のレシートを作成。
人間の価値を問う、対話型アート。
6＋「洗濯人間」＋心の浄化を提唱？洗濯物でつながって行進だ。
7｜３人の(!?)折元さんと展示室で記念撮影。

レビュー REVIEW レポート

「ベリー　ベリー　ヒューマン」

2005年10月15日・12月25日
豊田市美術館

中部地方を活動ベースとする60年代後半から70年代生まれの8人の作家を集めた企画展「ベリーベリーヒューマン」が豊田市美術館で開かれた。広々と清 潔な展示空間に伸びやかに展示された作品群は単純にきれい、おもしろいといった視点でも十分に楽しめるものだが、そこにはそれぞれの作家の視点や意識、 感性などが込められている。本学の卒業生二名が8人のなかに選ばれ出品しているのでここで紹介したい。　デザイン学部講師　瀬田哲司

古池大介　**1999年 大学院美術研究科修了**
展示室の正面の壁面いっぱいに映し出された映像は"山"のようだ。だがよくみるとそれはゆっくりと動いている。山が動くというありえない状況を目の前にした私たちは現実と非現実のあいだを行ったり来たりするような感覚に襲われる。手前の壁面と床には実際の撮影場所となった場所を文章と写真で歴史的にフィクションを交えてリアルに解説した資料を展示し、映像の非現実感を際立たせている。

鬼頭健吾　**2001年 絵画科洋画コース卒業**
豊田市美術館の二階には通常の二階分の天井高のある巨大に展示空間がある、その展示室に天井に届きそうなほどのインスタレーションが展示されている。カラフルなプラスチックの輪がつながり組み上がったそれはまるで巨大なこどもがブロックで遊んだあとのようだ。鬼頭の弁によるとそれは「人工精製した人体」を表現しているそうだ。なるほどそれは血管やリンパ管のようにも見える。だがそこにはおどろおどろしさや不気味さはなく無邪気でさわやかだ。

扇 千花 展

2005年10月9日 − 11月6日
Gallery NAF

これまで空間そのものの作品化を課題として、インスタレーション作品の作品を行なってきた。それは、オブジェの圧倒的な力によって、空間を変えるのではない。存在感が希薄な素材である布、紙、糸などの特性を使って、物質と周囲空間との相互依存関係をつくりだし、空間の表情を変えることをテーマとしてきた。近年、オブジェを設置することによって空間の表情を変える方法から、影をモチーフとして空間を捉える可能性を考察している。光とそれがつくる影は、最も相互依存関係にあると考えたからである。

今回発表した作品「虚実皮膜」は、私の影の映像と観客自身の影を素材にしたインタラクティブなインスタレーションである。この空間には、今まで制作してきた紙のオブジェが吊ってあり、その影が壁に映っているのだが、中には映像の影も含まれている。そのことに気付いた観客は、「本物の影」「偽物の影」と呼んでいた。虚像である影に本物や偽物の区別があるとは考えにくいが、面白い表現である。また、会場に子ども達が入ったとき、彼らは私の影の映像にすぐに反応した。自分の影より小さい私の影を、子どもの影は蹴ったり撫でたりして遊んでいた。この子どもたちは、別の友達を誘って何回もこの空間に来た。この作品は観客が私の影と関わることによって成立するので、彼ら小さな観客の素直な行動をうれしく思った。　デザイン学部助教授　扇 千花

佐久島アートガイド大作戦

2005年10月中の土・日曜日
愛知県一色町佐久島

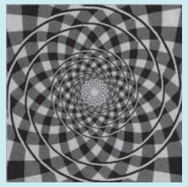
今年のゴールデンウィーク、これまで島のアートプロジェクト（三河・佐久島アートプラン21）をサポートしてきたボランティアスタッフたちによって、島の玄関口である一色町の渡船場が改修された。この改修工事が大変好評だったことから、第2弾として計画されたのが今回のプロジェクトだ。今回は本学の学生11名からなるプロジェクトチームで、島内に常設展示されている9作品と木村崇人展をガイドツアーでまわるというもの。6月から学内や佐久島で何度もミーティングを行い、最終的に2つのコース「佐久島路上観察」と「佐久島歴史体験」を設定した。学生たちは単に作品を紹介するだけでなく、島民ボランティアによる伝統的な佐久島太鼓の実演や、島の歴史を訪れた人々に知ってもらおうと、島のお年寄りから昔話を聞き、作品が設置されている場の由来を紙芝居に仕上げて参加者に披露した。このアートプロジェクトを通した一連の活動が、ボランティアスタッフにとっては人や自然との関わりの中で生まれてくる様々な出来事を学ぶ「場」となり、島の人々、とりわけ熱心な島民ボランティアとして活躍した小中学生にとって、島の歴史を振り返り、島の宝を再発見するきっかけづくりになったように感じた。
また、これらの活動に関わったすべてのボランティアスタッフに対して一色町より感謝状が贈られたことを聞き、戸惑いながらも喜びにあふれた学生たちの笑顔が印象的だった。
三河・佐久島アートプラン21: http://www.m-mole.com/sakushima/

「ようこそ佐久島！渡船場大作戦」
改修前／改修後

「佐久島アートガイド大作戦」の様子　写真：香村聖文

RELAY ESSAY

「錯視」に惑わされて４０年 …… 後藤倖男



私は、"挿入図"のような「錯視（幾何学的錯視）」に惑わされて、すでに４０年以上もその研究に取り組んできました。錯視には様々な種類がありますが、それらは、「知覚された外界の対象（形や大きさ）が、実際の物理的な構造と異なることを知って驚き、それらに興味を抱く現象」とでも要約できるように思われます。この現象は、いわゆる錯誤（見誤り）とは異なり、「視覚対象の物理的な構造とのずれを（計測などによって）指摘されても、知覚（見え）の歪みを修正することが困難であること」が大きな特徴です。

挿入図の錯視は、「錯視の王様」とも呼ばれている有名な幾何学的錯視（フレーザーの渦巻き錯視）です。物理的には"何重もの同心円"が描かれていますが、私たちには、それらが"奥に引き込んでいく螺旋"としか見えません。

私も、フレーザー，J．にならって、「ゴトウ錯視」の提出を目指して努力してきました。しかし、数多くの試作品は、いずれも、これまでの錯視の平凡な変形にとどまり、しかも、インパクト（錯視の強さ）の弱いもので、自分の創作的能力の限界を思い知らされることになりました。

そこで、新しい錯視の提出をあきらめ、その代償として、「錯視の成立要因の解明」に方向を転換しました。ここ２０年ほどは、共同研究者とともに、「多様な幾何学的錯視の刺激提示条件の分析」（様々な錯視を回転させたり振動させたりした場合の "特徴的な見え" を調べる研究）を行ってきました。そして、最近になって、これらの錯視が、『"空間・位置"、"角度・方向"、"同化・対比"の３種類の成立要因の組み合わせから構成されている』（後藤・田中（編著）：「錯視の科学ハンドブック」、東京大学出版会）との結論に至りました。

強烈な錯視効果を示す「フレーザーの渦巻き錯視」は、上記の３要因がいずれも強く関与している（角度が少しずつ変化する同心円の斜線部分が螺旋に同化し、同心円の大きさの縮小によって、奥への空間的な引き込みが生じている）と説明できるように思われます。

さらに、「分かっているけれども、そのように（歪んで）見えてしまうことは、どうしようもない」という錯視の特質は、われわれの"信念"や"誘惑"と、何か心理的な共通点があるように思われ、私は、これからも「錯視」から逃れられそうにありません。　デザイン学部教養部会教授（心理学）